

IV 機関誌『人文研究』総目録（第一集～第百五十集）

○第一集（一九五四年十一月発行）

ヘミングウェイにおける「ヒリスムの意味」
社会科学の立ち遅れ
ニイチェのパスカル問題
十九世紀におけるドイツ国家意識の変遷
原子関係の諸書について

福田 実
山 本 新
信 太 正 三
長 井 和 雄
菅 井 準 一

○第二集（一九五五年三月発行）

半封建的土地所有制と農地改革
ニイチェに於ける「中世紀の終り」
十六、七世紀における西班牙「騎士道小説」
「牧人小説」「悪者小説」の発生と影響
正統と異端
ヤスパースにおける「包括者」の概念

山 田 操
信 太 正 三
大 林 多 吉
山 本 新
草 薙 正 夫

○第四集（一九五五年十一月発行）

リルケの『鎮魂歌』におけるテーマについて
“A Farewell to Arms”の主題
詩劇エトナ山上のエンペドクレス
代名詞における格の転用に就いて
“A Friend of Mine” vs. “One of My Friends”

塚 越 敏
福 田 実
須 藤 兼 吉
小 倉 兼 秋
勝 又 永 朗

○第三集 外国文学・語学特集 （一九五五年六月発行）

John Keats Ode to a Nightingale
D・H・ロレンスにおける対極の観念
ボードレールにおける交感のソネについて

相 原 幸 一
飯 田 耕 作
芹 沢 純

○第五集（一九五六年三月五日発行）

ニツク・アダムズの脱出
日本農業と「二つの道」論
政治と宗教
〈紹介の批評〉ヤスパース著 森 昭訳

福 田 実
山 田 操
山 本 新

ニイチェにおける革命と反革命
人間・この逆説的なもの
シュプランガーの宗教論
イスパニア人の性格
〈書 評〉ヤスパース著 草薙 正夫訳
『現代の精神的課題』

信 太 正 三
山 本 新
長 井 和 雄
渡 部 登
信 太 正 三

『大学の理念』

草薨 正夫

○第九集（一九五七年六月発行）

カントにおける根本悪

煙草作地帯農村史（寛書其の一）

シュプランガーにおけるボン基本法と

青年教育

信太 正三
山田 操

○第八集 外国文学特集号

（一九五六年七月発行）

トマス・スタージ・ムアのガゼルズを読む

メルヴィルの形成

T・E・ヒューム持論

ラスキンの美学

トマス・ハーディ「ザ・デナスツ」の

構想について

須藤 兼吉
向井 俊二
相原 幸一
小倉 兼秋

○第十集 外国文学・語学特集号

（一九五八年一月発行）

詩Daubeに描かれた海洋の姿態

T・E・ヒュームとH・リード

「マーディ」について

—メルヴィルの芸術の原型—

日本の詩の英訳について

若きリルケにおける

ヤコブセンの影響について

Cockney—その発音と語法

須藤 兼吉
相原 幸一

○第七集（一九五六年八月三十一日発行）

教育学における精神科学的方法

形而上的反抗と自由の問題

ルネサンス（上）

〈書 評〉信太正三著『ニイチエ研究』

長井 和雄
信太 正三
山本 新
草薨 正夫

○第八集（一九五七年二月発行）

フォイエルバッハ人間学の問題と逆説性

明治前期における農民の動向

晩年のD・H・ロレンス

ルネサンス（中）

信太 正三
山田 操
山田 耕作
飯田 耕作
山本 新

○第十一集（一九五八年二月発行）

国家対人間の基本問題

「地方自治」と地主制の展開

家族的擬制の倫理

社会・科学Ⅱ技術・文化

大熊 信行
山田 操
山田 正三
山本 新

暗号解説 (Chifferlesen) とその

形而上学 (I)

〔書 評〕 大熊信行著『国家悪』

長井和雄著『シュプランガー』

草薨正夫
信太正三
村井実

○第十二集 (一九五八年六月発行)

文明論の誕生と系譜

大正期「農村問題」の構造

ヘーゲルの教育学的思考

山本新
山田操
長井和雄

○第十三集 (一九五八年十二月発行)

経済更生運動と「窮乏の農村」

―農村ファシズム化の進行―

瞑想的ニヒリズム

―『地下生活者の手記』覚書―

文明の闘争と高度宗教

暗号解説としての形而上学 (承前)

山田操
信太正三
山本新
草薨正夫

○第十四集 (一九五九年二月発行)

W・B・イエイツ―最後の詩集序説―

エリオットとリード

The Brigs of Ayr

Melville's Quest for the Heart in Pierre

島津昭
相原幸一
須藤兼吉
Shunji Mukai

〔書 評〕 (研究書解説) "Essays in Linguistics"

by Joseph H. Greenberg 杉原正孝

○第十五集 (一九五九年九月発行)

人倫の意味構造

ファシズム期の農村新体制

暗号解説としての形而上学

―暗号及び暗号解説の構造―

キリスト教の伝播と近代日本

信太正三
山田操
草薨正夫
山本新

○第十六集 (一九六〇年五月発行)

喪神群像―其の一「罪と罰」

歴史的未來と教育

人間学と実存論

トインビー批判

英語の強意表現考察

―特に強意的直喩について―

〔書 評〕 二つの歴史観

―ブルトマンとレーヴィット―

信太正三
長井和雄
草薨正夫
山本新
山下雅巳
信太正三

○第十七集 (一九六〇年十一月発行)

文明論の先達

喪神群像―其の二「白痴」

山本新
信太正三

町村合併と部落

— 神奈川県内陸地帯の場合 —
ヤスパースの歴史論

山田 操
草薨 正夫

○第二十集（一九六一年九月発行）

ニイチェにおけるニヒリズムの問題
地域社会と行政広報（上）
子供の成長と教育の冒険性
実存と〈交わり〉
日本文明論の近視的性格

信太 正三
山田 操
長井 和雄
草薨 正夫
山本 新

○第十八集 外国文学・語学特集号

（一九六一年三月発行）

Gates of Damascus
イエイツとエリオット
H・リードの芸術教育論
オルダス・ハックスレイ

須藤 兼吉
島津 昭
相原 幸一

○第二十一集 外国文学・語学特集号

（一九六一年十二月発行）

— 神秘主義への道程 —
フーゴー・フォン・ホーフマンスタールと
危機の意識 — 「帰国者の手紙」をめぐる —
Shakespeareにおける Shall will の用法について
代名詞考 — 形態と機能 —

須藤 明
菊池 武弘
中村 駿夫
山下 雅巳

James Elroy Flecker の

詩にみられる三つの要素

H・リードの浪漫主義
「The Negro in "Benito Cereno"」
オルダス・ハックスレイ

須藤 兼吉
相原 幸一
向井 俊二

— 神秘主義への道程 — （下）

デイドロの小説とドイツ

須藤 明
永島 中

実存哲学者としてのニイチェ

— ヤスパースのニイチェ解釈について —

草薨 正夫

○第十九集（一九六一年五月発行）

シュライエルマッヘル教育学の市民的性格
ニヒリズムと永遠回帰
文明論の先達（下）
日本体育史試論

長井 和雄
信太 正三
山本 新

— 明治時代以前の体育と衛生 —

吉川知生・門田昭三

○第二十二集（一九六二年四月発行）

文化的エネルギーと教育
ペシニズムとデカタンス
— 「ニイチェにおけるニヒリズム」其の二 —

長井 和雄
信太 正三

スピノザの神概念の形成について
ヤスバースにおける哲学と科学

工藤喜作
草薨正夫

○第二十三集（一九六二年十月発行）

限界状況・挫折・超越

―ヤスバース哲学の方法―

スピノザの自然と延長の世界

T・E・ヒュームよりH・リードへ

伝播における様式と価値

草薨正夫
工藤喜作
相原幸一
山本新

○第二十四集 十周年記念特集号

（一九六三年二月発行）

老桂冠詩人ジョン・メイスフィールド氏の

海への郷愁

ハーバート・リード序説

『緋文字』におけるホーソンの「人生哲学」

バートランド・ラッセルの宗教観

近郊農村と農民

―電波運動をめぐる―

力への意志と超人

―ニイチエにおけるニヒリズム・其の三―

スピノザの合理主義と自然権

英語の語彙に入った日本語について

須藤兼吉
相原幸一
島秀夫
岩谷元輝
山田操
信太正三
工藤喜作
田中菊雄

非西洋における近代化（二）
十年の回顧
「新刊書評」

人文学会十年の歩み

○第二十五集（一九六三年十二月発行）

キリストのニヒリズム

―ニイチエにおける

ニヒリズムの問題 其の四―

スピノザの理性と経験

人間存在についての覚書

―単独者と全人類の間―

非西洋の近代化（二）

デイドロにおける宿命論

○第二十六集（一九六四年二月発行）

WalesのBaraと彼らの詩について

リチャード三世諸版本間の関係

「対位法」研究

―その内容と形式について―

Shakespeareにおける'shout, would's

用法について

―現代英語との比較―

山本新
草薨正夫
永島中
長井和雄
信太正三
工藤喜作
神川正彦
山本新
永島中
須藤兼吉
平田満男
須藤明
中村駿夫

Here, There And Everywhere?

— 英文法覚え書 —

Robynson 訳 UTOPIA — 文法覚え書

山下 雅己
松川 昇太郎

○第二十九集（一九六五年二月発行）

ヤスパースの政治思想

住民組織論覚え書（二）

— 行政と住民組織の機能 —

草薙 正夫
山田 操

○第二十七集（一九六四年九月発行）

教育学に対する精神史の意義

歴史のことば

スピノザの方法（二）

ニーチェ解釈の方法試論

非西洋の近代化（三）

内村鑑三おぼえ書き

長井 和雄
神川 正彦
工藤 喜作
信太 正三
山本 新
岩谷 元輝

○第三十集（一九六五年五月発行）

メルビルのアメリカ批判

校訂と「文学」

— ヴェニスの商人・本文批評 —

灰色の高僧をめぐる

— オルダス・ハックスレイにおける

二つの世界の分裂 —

Robynson 訳 UTOPIA

— 文法覚え書（補遺） —

ドイツ文の分析

平田 満男
須藤 明
松川 昇太郎
妹尾 幹

○第二十八集（一九六四年十二月発行）

疎外の論理と「進歩としての歴史」

— 疎外論の克服のために —

住民組織論覚え書

— 横浜市におけるその経過について —

ハムレット校訂の諸問題

— 言葉というものは弄んでいる間に

どうにでもなってしまう（十二夜） —

スピノザの方法（二）

— 幾何学的方法の諸問題 —

刺戟伝播

平田 満男
工藤 喜作
山本 新

○第三十一集（一九六五年十月発行）

歴史の構図（上）

— その「ひろき」と「ふかき」 —

神川 正彦

スピノザに於ける愛のロゴス

〈神の死について〉

文明設定の争点 (二)

内村鑑三覚え書 (その二)

工藤喜作
信太正三
山本新
岩谷元輝

歴史の構図 (中)

— その「ひろき」と「ふかき」—

スピノザのコナツスについて

ニーチェにおける運命意識

— 一つの覚書 —

日本書紀古事記の語彙の比較研究 (二)

— 紀記先後の辨資料 —

神川正彦
工藤喜作
信太正三
富山民藏

○第三十二集 (一九六六年二月発行)

H・リードの芸術論 (その二)

『恋する女たち』の主題

— 均衡と崩壊 —

鵬外とスペイン語 (覚書)

コロンプス (二)

— その生立と壮途出港まで —

S→NP+VP (一)

— Verb patterns 試論 —

NOTAS SOBRE LA

ENSEÑANZA DEL ESPAÑOL

EL SISTEMA ESCOLAR EN ESPAÑA

EL PRIMER AÑO DEL PLAN DE

DESAROLLO ECONOMICO

Y SOCIAL ESPAÑOL

相原幸一
江頭輝雄
会田由
渡部登
山下雅己
Tatsuo Okada
José Mata Trani

José Antonio

Millán Fuertes

○第三十三集 (一九六六年三月発行)

分析書誌学派の動向

平田満男

○第三十四集 (一九六六年十月発行)

ドイツの歴史学と極東 (二)

— オットー・ベッカーの極東外交 —

歴史の構図 (下)

— その「ひろき」と「ふかき」 —

茶美の構造

日本書紀古事記の語彙の比較研究 (二)

文明の世代論

神川正彦
石田吉貞
富山民藏
山本新

○第三十五集 (一九六七年二月発行)

H・リードにおけるローマン主義詩論の成立

— 「一びき狼への道」 —

シェイクスピア本文の不定性

マッシュウー・アーノルド

Subcategorization の二、三の問題

相原幸一
平田満男
中川敏
足田三良

○第三十八集（一九六七年四月発行）

歴史における物語性

— 歴史のことば（中の二） —

神川正彦

文芸論史的背景とその内容 —
テューダー朝前期劇の展開（二）
— 道徳劇から風俗劇へ —相原幸一
平田満男

ドイツの歴史学と極東

—（二）第一次世界大戦をめぐる

ヘルツレの研究 —

三宅正樹

内村鑑三おぼえ書き（その三）

岩谷元輝

○第三十九集（一九六八年五月発行）
スピノザの無限と宇宙
歴史叙述のコンシスタンス
— 歴史のことば（下） —

工藤喜作

文明の変動と世俗化（下）

神川正彦

○第三十七集（一九六七年十月発行）

歴史における物語性

— 歴史のことば（中の二） —

神川正彦

ドイツの歴史学と極東

—（三）ゲオルク・ケルストの

「二つの文化」論争とA・ハックスレー
— 文学と科学をめぐる問題（上） —山本新
須藤明

幕末日本研究 —

三宅正樹

○第四十集（一九六八年十月発行）

歴史認識問題の歴史的定位

内村鑑三おぼえ書き（その四）

岩谷元輝

— 歴史の認識（上） —

神川正彦

— 世俗化の比較研究 —

山本新

スピノザ聖書解釈の方法について
ワーズワスの般若直観工藤喜作
近藤正栄

○第三十八集 外国文学・語学特集

（一九六八年三月発行）

「ベント・セレノ」再考

向井俊二

H・リードにおける正統の探求

○第四十一集（一九六六年十二月発行）
孤独と文学（その二）
— ワーズワスの詩心の成長 —

近藤正栄

— アナキズム論の

Erasmusの描じたThomas More像
Advanced R P U C ョ
PARKER CHRONICLEの構文

— 統語法と文体の間 —

松川昇太郎
中村駿夫
東保憲

○第四十二集（一九六九年三月発行）

歴史的説明の諸相

— 歴史の認識（中ノ一） —

スピノザにおける預言と哲学

自然法爾と横超

— 宗教と倫理との関わりの問題をめぐる —

神川正彦
工藤喜作
信太正三

○第四十三集（一九六九年十二月発行）

歴史的説明の諸相

— 歴史の認識（中ノ二） —

ドイツの歴史学と極東（四）

— 石井菊次郎とオットー・ベッカー —

孤独と文学（その二）

— 『後樂園』におけるセイトンの闘争 —

神川正彦
三宅正樹
近藤正栄

○第四十四集（一九七〇年一月発行）

スピノザの宗教観

ピューリタンとしてのミルトン

工藤喜作

— 『失樂園』を中心に —
Beowulfの不定詞

S → NP + VP (一) — Verb Pattern 試論 —

サイデンステッカーと荷風

近藤正栄
東保憲
山下雅己
秋山勇造

○第四十五集（一九七〇年三月発行）

エビクロスの倫理説についての一考察

国際的コミュニケーションの一般意味論

— 対立と協調のセマンティックス —

スピノザの宗教観（二）

内村鑑三おぼえ書き（その六）

岡野哲士
神川正彦
工藤喜作
岩谷元輝

○第四十六集 文学・語学特集
（一九七〇年十二月発行）

黒人問題・一八三二年と一九六七年

— 『ナット・ターナー』の告白論 —

「二つの文化」論争とA・ハックスレー

— 文学と科学をめぐる問題（中） —

孤独と文学（その三）

— 『緋文字』の悲劇性 —

八千矛物語の成立

— 忌部首子首の追憶 —

William Roper: "Life of Thomas More"

向井俊二
須藤明
近藤正栄
佐野正巳
松川昇太郎

二つのすみだ川

秋山勇造

○第四十九集（一九七一年七月発行）

孤独と文学（その四）

—『失楽園』の主題—

近藤正栄

○第四十七集（一九七一年二月発行）

コロンブス（二）

—新大陸の発見、—その死—

渡部登

スピノザの国家観（二）

資料と解説（上）
三宅正樹

サー・トマス・モア伝（その一）

工藤喜作

—ウィリヤム・ローパー〔翻訳と註解〕—

松川昇太郎

聖書の翻訳における宗教的ドグマ

—RSV, NEB, 国語訳について—

近藤正栄

—その精神的発展としての—

内面への道について—

中村浩平

○第四十八集（一九七一年四月発行）

月光文明と仮晶

山本新

歴史主義と歴史及社会科学の方法論的

ブレヒトのガリレイ評価をめぐって
—『ガリレイの生涯』小論—
A Semantic Analysis of 'Carry' and Its
Synonymous Words塚田眞幸
Yoshiaki Arai

変貌をめぐる思想的破壊の覚書（二）

神川正彦

スピノザの国家観（二）

工藤喜作

宣長の優越意識（二）

○第五十集（一九七二年一月発行）

—学問・思想の軌跡—

佐野正巳

W・ローパー「トマス・モア伝」その二

松川昇太郎

カフカの《Der Bau》

言葉のテキストとコンテクスト
—思想的破壊の覚書 原理論（一）—
「日独伊同盟条約締結要録」

神川正彦

—人間の存在基盤としての—

資料と解説（中）

三宅正樹

家の意味についての試論（二）—

中村浩平

京浜における都市問題の系譜（二）

—三宅磐をめぐって—
山田 操
ロシヤ文明の位置づけ
山本 新
自己愛容のドラマ

—『虹』をめぐって—
江頭 輝雄
孤独と文学(その五) — テスの悲劇 —
近藤 正栄
ユダヤ系作家と読者

—現代アメリカ文学試論—
向井 俊二
W・ローパー「トマス・モア伝」その三
—翻訳と注解—
松川 昇太郎

A Semantic Analysis of 'Put' and Its
Analogous Words
Yoshiaki Arai

○第五十一集 (一九七二年四月発行)
ドナルド・キーン「日本文化論」

—紹介と雑感—
秋山 勇造
山上の垂訓
—英語訳聖書と宗教的ドグマ(一)—
近藤 正栄

Generation of German Decomound
Verbs with Double Determinants
Herab, Hinab, etc. and their
Co-occurrence Relations with

Prepositional Phrases of Place*
荒井 義明
OE Transition 概観

—Peterborough Chronicle
後半の英語について—
東 保憲

○第五十二集 (一九七二年九月発行)
言葉のテキストとコンテクスト

—思想的破壊の覚書、原理論(二)—
神川 正彦
スビノザの国家観(五)
—「日独伊同盟条件締結要録」
工藤 喜作

資料と解説(下の一)
三宅 正樹
Function and Meaning of 'Away' in the
Verb-Particle Combination
荒井 義明

○第五十三集 文学・語学特集号
(一九七二年十二月発行)

—紹介—「日本文化における伝統と近代化」
—ハワード・S・ヒンバット—
秋山 勇造
「夏目漱石と心理小説」—
バンジヤマン・コンスタンズにおける

死のイメージ
—〈アドルフ〉を中心に—
佐藤 夏生
山上の垂訓
—英語訳聖書と宗教的ドグマ(二)—
近藤 正栄

Cutとその類義語の意味分析
荒井 義明

○第五十四集（一九七三年一月発行）

世界国家の亡霊

言語のテキストとコンテキスト

— 思想的破壊の覚書・原理論（三）—

スピノザの国家観（六）

京浜における都市問題の系譜（二）

— 三七瞥をめぐって—

「日独伊同盟条約締結要録」

資料と解説（下の二・完）

○第五十五集 二十周年記念特集号

（一九七三年四月発行）

ディアスボラの歴史の意味

言語のテキストとコンテキスト

— 思想的破壊の覚書・原理論（四）—

スピノザの国家観（七）

孤独と文学（その六）

— ワーズワスとキーツの接点—

ロレンスの文学論についての覚え書

京浜における都市問題の系譜（四）

— 関東大震災と横浜復興（二）—

「リップントロップ覚書」をめぐって

〈紹 介〉シャイブリー編

「日本文化における伝統と近代化」

（二）エドウィン・マクレラン

「藤村と自伝小説」

二〇年をかえりみて

人文学会の諸活動

人文学会学生部会諸活動

Eine kleine Skizze über Kafkas

Entwicklung

英語週日名の語源（一）

And 連用の構文について

○第五十六集（一九七三年九月発行）

言語テキストとコンテキスト

— 思想的破壊の覚書・原理論（五）—

スピノザの国家観（八）

孤独と文学（その七）

— 反逆児バイロン—

京浜における都市問題の系譜（五）

— 関東大震災と横浜復興（二）—

欧化と国粹

英語週日名の語源（二）

「随想録」と幽愁の系譜（二）

Friedrich Naumann, das deutsche

山本 新

神川 正彦

工藤 喜作

山田 操

三宅 正樹

山田 操

三宅 正樹

山本 新

神川 正彦

工藤 喜作

近藤 正栄

江頭 輝雄

山田 操

三宅 正樹

山田 操

山田 操

山田 操

山田 操

山田 操

山田 操

山田 操

山田 操

山田 操

山田 操

山田 操

山田 操

秋山 勇造

山本 新

山本 新

山本 新

山本 新

山本 新

山本 新

山本 新

山本 新

山本 新

山本 新

山本 新

山本 新

山本 新

山本 新

山本 新

山本 新

山本 新

山本 新

山本 新

山本 新

山本 新

山本 新

山本 新

山本 新

Kaiserreich unter Wilhelm II.
und Japan vor der Niederlage des
Jahres 1945

— Eine Studie über Friedrich

Naumann mit besonderer

Berücksichtigung der japanischen

Geisteswelt — Masaki Miyake

○第五十七集（一九七三年十一月発行）

言語のテキストとコンテキスト

— 思想的破壊の覚書、原理論（六）—

スピノザにおける国家と自然

米国における言語学と心理学の間（上）

— 言語心理学への道標 —

〈縮〉 企 シャイブリー編

「日本文化における伝統と近代化」

（三）ロバートH・ブラウアー

「正岡子規と短歌の改革」

○第五十八集（一九七四年一月発行）

言語のテキストとコンテキスト

— 思想的破壊の覚書、原理論（七）—

ホッブズとスピノザ

— 主として方法論に関して — 工藤喜作

〈縮〉 企 シャイブリー編

「日本文化における伝統と近代化」

（四）エドワード・サイデンステイ

ツカー「小林秀雄論」(その二)

山上の垂訓

— 英語訳聖書と宗教的ドグマ（3）—

○第五十九集（一九七四年五月発行）

ラテン・アメリカにおける農地改革の特質

米国における言語学と心理学の間（中）

— 言語心理学への道標 —

相模国府の所在について

〈縮〉 企 シャイブリー編

「日本文化における伝統と近代化」

（四）エドワード・サイデンステイ

ツカー「小林秀雄論」(その二)

バンジャマン・コンスタンの

〈宗教感情〉について

CAI学習プログラムに関する研究

— デザインと構成上の原則について —

Friedrich Naumann, das deutsche

Kaiserreich unter Wilhelm II. und

近藤正栄

石井陽一
伊藤克敏
木下良

秋山勇造
秋山勇造

佐藤夏生
島田昌幸

Japan vor der Niederlage des Jahres 1945

— Eine Studie über Friedrich

Naumann mit besonderer Betri-

cksichtigung der japanischen

Geisteswelt—Teil 2. Masaki Miyake

○第六十集（一九七四年十一月発行）

二つの疎外の構造

—メルヴィル「バートルビー」論—

ホブズの方法

日向国府の変遷

移民と移住者の概念

—用語の変遷とその歴史的背景—

古医方と国学—国学の成立の基盤—

オネッティの「井戸」をめぐる

—現代フテン・アメリカ文学賞書—

『ディンタン・アベ』考

○第六十二集（一九七五年六月発行）

ホブズのコナツス

転換期のソ連外交 — 課題と展望 —

古文辞学と国学 — 宣長学成立の基盤 —

英語教育の中の評価（その二）

— Criterion-referenced Test —

個別学習機器とその評価（二）

○第六十三集（一九七五年十月発行）

ヘーゲルとインド哲学

難民の概念

A・ハックスレー

— 文学と科学の問題をめぐる —

米国における言語学と心理学（下）

— 言語心理学への道標 —

中世スペインにおける

ユダヤ人の役割について

孤独と文学 — 理想美追求のシェリ —

接尾語 -ie, -er を持つ動詞（二）

ウィリアム・ワーズワスの「逍遙篇」

(The Excursion) に関する一考察

黒沢 惟昭

藤田 一成

近藤 正栄

荒井 義明

岩崎 豊太郎

工藤 喜作

中西 治

佐野 正巳

大友 賢二

島田 昌幸

湯田 豊

石井 陽一

須藤 明

伊藤 克敏

○第六十一集（一九七五年一月発行）

谷崎潤一郎の歴史小説

— 主として「聞書抄」について —

ネーデルラント共和国とスピノザ

ヘーゲルの教育観について（二）

前川 清太郎

工藤 喜作

〈研究ノート〉マークス・ガーヴェイの幻の国家
ウィリアム・ワーズワスの「逍遙篇」

疋田 三良

(The Excursion) に関する一考察(一)
Auto Sacramental 〈一〉

岩崎豊太郎

(聖餐神秘劇) その型式と定義

岩根 罔和

○第六十四集(一九七六年四月発行)

スピノザの「書簡集」の研究

工藤 喜作

インド論理学入門(上)

湯田 豊

十八世紀スペインにおける農業問題の本質

——土地所有メカニズムの解明——

藤田 一成

永井荷風——詩心のゆくえ——

秋山 勇造

ウィリアム・ワーズワスの「逍遙篇」

岩崎豊太郎

(The Excursion) に関する一考察(三)
Auto Sacramental 〈二〉

Examen Sacrumと題する一篇について

岩根 罔和

○第六十五集(一九七六年九月発行)

老人サンチャゴにおける職業人の人間像

向井 俊二

インド論理学入門(下)

湯田 豊

高度宗教の本質剥離

山本 新

〈資料紹介〉マリオ・A・マナコルダ

『グラムシの教育思想』

黒沢 惟昭

「Things rank and gross in nature」
— A study of Hamlet in terms of
melancholy (一)

Tsuyoshi Hashimoto

○第六十六集(一九七七年一月発行)

社会ダーウイン主義の「機能転換」(上)

——アメリカ革新主義教育思想研究(一)——

森田 尚人

社会教育の国家論

——二つの社会教育の媒介の論理——

黒沢 惟昭

トインビーのルネサンス観

セーサル・バリエッホをめぐる一考察

山本 新

——その一——

大林 文彦

ウィリアム・ワーズワスの「逍遙篇」

(The Excursion) に関する一考察(四)

岩崎豊太郎

○第六十七集(一九七七年四月発行)

ウパニシャッドの哲人シャーンディリヤ

——再評価——

湯田 豊

反ユダヤ主義の構造

社会ダーウイン主義の「機能転換」(下)

藤田 一成

——アメリカ革新主義教育思想研究(二)——

森田 尚人

ヘーゲルの教育観について(二)

——『法の哲学』を中心に——

黒沢 惟昭

○第六十八集（一九七七年十一月発行）

スピノザの形而上学、認識、宗教について

〈没後三〇〇年を記念して〉

ヤージニャヴァルキヤII — 形而上学 —

開拓者の後裔

— 『セールスマンの死』考 —

ブラック・ナシヨナリズム考（その二）

— ガーヴェイイズムとブラック・パワー —

接頭辞 *bio-* を持つ英語派生動詞

セーサル・バリエッホをめぐる一考察

— その二 —

○第六十九集（一九七八年三月発行）

『メインストリート』・女と男性社会

インド哲学における存在の問題について

ユダヤ人問題の変質

— コンベルソ大量出現の背景 —

接頭辞 *bio-* を持つ英語派生動詞

『グラスミアの居住』(Home at

Grasmere) に関する一考察(上)

○第七十集（一九七八年三月発行）

日本古代官道の復原的研究に関する諸問題

— 特にその直線的路線形態について —
インド唯物論について 木下 良

— サルヴァ・ダルシヤ・サングラハ —

第一章唯物論の哲学体系 —

接頭辞 *bio-* を持つ英語派生動詞

アーサー・ミラー劇における

イブセン的回想構成の展開(II)

ドイツ亡命とチエコスロヴァキア

(一九三三—一九三八) (I) 鈴木英允

○第七十一集（一九七八年九月発行）

心理的なものと理念的なもの

— フツサール著「数の概念について」 —

論文の二考察 — 鈴木修一

ヤコビにおける直接知としての信仰 工藤喜作

『屠殺場五号』・戦争と平和へのアプローチ 向井俊二

文学の二性性相原理と中世文学

— 文学批判の原理と英文学(一) — 近藤正栄

昭和五十二年度 人文学会活動報告

Izida no Yulgata 俗ラテン語研究 (I) 太田強正

○第七十二集（一九七九年一月発行）

ブラック・ナシヨナリズム考（その二）

―ブラック・マズリムズを加えて―
ルネサンス文学の二つの流れ(上)

―文学批評の原理と英文学(二)―
ホールデン・コールフィールドにおける

反抗と成熟

リグ・ヴェーダーの創造讃歌について

トルコの欧化による世俗化

ヤコビにおける理性と悟性

接頭辞 pro を持つ英語派生動詞(二)

積木分類課題におけるティーチング・

スタイル：日米の母親と教師の比較

疋田 三良

近藤 正栄

向井 俊二

湯田 豊

山本 新

工藤 喜作

荒井 義明

渡邊 恵子

接頭辞 pro を持つ英語派生動詞(二)

荒井 義明

○第七十四集(一九七九年十月発行)

『コロンブス研究』(その二)

コロンブスの結婚をめぐる

クラター事件における

アメリカ的フィクションの完成

―『冷血』論―

ウパニシャッド

―古代インドの呪術の世界―

『グラスミアの住居』(Home at Grasmere)

に関する一考察(下)

湯田 豊

岩崎 豊太郎

○第七十三集(一九七九年三月発行)

シェリング研究序説

『自我について』を中心にして

類型化と理念化

宇佐見瀧水伝記考証序説

「三言」の一特質

―「士人出世談」をめぐる―

北攝農村の農地改革―箕面市の場合―

昭和五十二年 人文学会活動報告

El Alcalde de Zalamea,

糊殻のイメージについて

工藤 喜作

鈴木 修一

佐野 正巳

山口 建治

宮井 隆

岩根 紈和

○第七十五集(一九八〇年二月発行)

『オスカー・ワイルド』の童話の考察

『コロンブス研究』(その二)

コロンブスの結婚をめぐる

ルネサンス文学の二つの流れ(中)

―文学批評の原理と英文学(三)―

初期仏教―再検討―

Mississippi Diary

接尾辞 -er を持つ動詞(二)

小泉 公史

青木 康征

近藤 正栄

湯田 豊

El M. Carmichael

荒井 義明

○第七十六集（一九八〇年四月発行）

マラマッドの文学におけるユダヤ人
ルネサンス文学の二つの流れ（下）

— 文学批評の原理と英文学（四）—

接尾辞 -er を持つ動詞（二）

Itala y Vulgata 俗ラテン語研究（II）

ドイツ亡命とチェコスロヴァキア

（一九三三〜一九三八）（II）

向井俊二

近藤正栄

荒井義明

太田強正

中村浩平

工藤喜作

湯田豊

向井俊二

青木康征

黒沢惟昭

山本新

工藤喜作

佐藤夏生

○第七十七集（一九八〇年九月発行）

マキアヴェリの Fortuna y Virtù について

ジャイナ教の教義

マラマッドの文学におけるユダヤ人（続）

『コロンブス研究』（その三）

コロンブスの結婚をめぐる

ヘーゲルの教育観について（三）

— 『法の哲学』を中心に—

文学と文明

故 山本 新先生を悼む

バンジャマン・コンスタンにおける死

— 感情のアンビヴァランスの問題を

中心として—

初期マルクスの人間と社会と教育観

— 現代教育学批判序説—

バガヴァッド・ギーターの倫理思想

合理主義・ヒューマニズムの文学（上）

— 文学批評の原理と英文学（五）—

積木分類課題におけるティーチング・

スタイル—その二：事例研究

鈴木英允

黒沢惟昭

湯田豊

近藤正栄

渡邊恵子

塚田眞幸

宮井隆

湯田豊

橘川慶二

岩崎豊太郎

小泉公史

○第七十九集（一九八一年四月発行）

ビーマン事件以後（上）

— DDR 批判派の動向—

満州移民と農地改革

— 長野県旧大日向村の事例—

ヴァイシエーシカ哲学

再びスペイン語の再帰文について

ワーズワスの『マイケル』について

バーナード・ショウのラファエロ前派劇

「キャンディダ」についての考察

EL LENGUAJE COLOQUIAL

Una introducción José A. Millán

○第七十八集（一九八一年二月発行）

悲劇的效果の一断面（二）

○第八十集（一九八一年十月発行）

社会教育における国家の問題

— 小川社会教育論の検討を通して —

ニヤーヤ学派の認識論と倫理学

『コロンブス研究』（その四）

コロンブスの結婚をめぐる

左大文学地域におけるシンルイ意識

— シンルイ構造・呼称・

伝統行事との関連 —

○第八十一集（一九八二年一月発行）

ユダヤ社会再生の気運

合理主義・ヒューマニズムの文学（下）

— 文学批評の原理と英文学（一六） —

こどもの言語発達と家庭環境

その一 こどもの言語発達測定具の再検討

重回帰分析による英語能力再考

《デルフィース》から《コリンヌ》へ

小説におけるスタール夫人の宗教観の軌跡

○第八十二集（一九八二年二月発行）

悲劇的效果の一断面（Ⅱ）

— 感情のアンビヴァランスの問題を

中心として —

イスパニダーの歴史的系譜

古典的サンキヤの体系

Varios aspectos del lenguaje coloquial

su importancia José A. Millán

○第八十三集（一九八二年九月発行）

中世におけるスペイン・ユダヤ社会の没落

— 迫害の爪痕 —

ヨーガ

社会化と個人の主体性（上）

— ジンメル社会学字の再検討 —

ホップスにおける実体と偶有性

スタール夫人の神秘主義について

○第八十四集（一九八三年一月発行）

ファイヒテにおける個体概念

中観と唯識

『金瓶梅』の表現方法について（二）

— 『水滸伝』との重複部分を中心に —

社会と個人の主体性（下）

— ジンメル社会学字の再検討 —

El verbo ser en el español coloquial

鈴木英允 石井陽一 湯田豊 青木康征 湯田豊 和崎春日 藤田一成 近藤正栄 藤田一成 渡邊恵子 大友賢二 佐藤夏生 鈴木陽一 湯田豊 横倉節夫 横倉節夫 José A. Millán

○八十五集（一九八三年三月発行）

フイヒテの「自己規定への要請」について 工藤 喜作
 ロマン主義文学

——文学批評の原理と英文学（七）—— 近藤 正栄
 El verbo ser en el español coloquial José A. Millán
 歴史学と歴史人口学（その一） 岡島 千幸

○第八十六集（一九八三年九月発行）

ユダヤ人に対する血の中傷 藤田 一成
 ——儀式殺人および聖体冒瀆をめぐる——
 地域区分論から類型論へ

——研究史的反省から—— 宮井 隆
 ある幻影の未来 ——フロイトと宗教—— 湯田 豊
 こどもの言語発達と家庭環境

その二 家庭環境要因の言語能力群差の分析 渡邊 恵子

○第八十七集（一九八三年十二月発行）

『コロンブス研究』（その五）

コロンブスの結婚をめぐるつて 青木 康征
 内村鱸香伝記考証序説（上） 佐野 正巳

ラ・グアルディア村儀式殺人事件（二） 藤田 一成
 ——スペインにおける血の中傷——
 トインビーと宗教（二） 湯田 豊

高度技術社会における日本の経営と労働者 横倉 節夫
 William Morris ユートピア

「無何有郷だより」の研究 小泉 公史

○第八十八集（一九八四年三月発行）

近代合理主義文学（前期） 近藤 正栄

——文学批評の原理と英文学（八）——
 ラ・グアルディア村儀式殺人事件（二） 藤田 一成
 ——スペインにおける血の中傷——

「拍案驚奇」に描かれた女性 ——聞蜚蛾の場合—— 山口 建治

トインビーと宗教（二） 湯田 豊
 『書評』『スペイン帝国の興亡』

一四六九〜一七二六 宮井 隆
 Walter Pater の短篇小説における 特質の考察 小泉 公史

歴史学と歴史人口学（その二） 岡島 千幸

○第八十九集（一九八四年九月発行）

近代合理主義文学（後期） 近藤 正栄

——文学批評の原理と英文学（九）——
 グラムシのヘゲモニー論を回る

若干の問題点（上）

—片桐薫『ヨーロッパ社会主義の可能性』

を読んで— 黒沢惟昭

詩劇と伝統

—『元老』からみた

T・S・エリオットの文学像— ジョン・ボチャラリ

○第九十集（一九八四年十二月発行）

ヘミングウェイにおける

スポーツの論理と効用

—“Soldier's Home”を中心に—

ウパニシャッドの哲学について

Glossa Silences 研究 I

二つの「羊飼いの劇」

—ジャック・ガルキオとマック（I）—

〈研究懇話会報告〉マンハッタン・オデュッセイ

（一九七七—一九八二）

○第九十一集（一九八五年二月発行）

『息子と恋人』の側面

—父と母と子の関係—

中世スペインにおける王族とユダヤ人の関係

—ユダヤ人侍医をめぐる—

ヘーゲルとドイツ初期ロマン主義

起源への夢

『言い誤りの心理言語学的考察』

二つの「羊飼いの劇」

—ジャック・ガルキオとマック（II）—

○第九十二集（一九八五年九月発行）

西洋哲学史の学び方

コメニウス・ルソの「自然」と「教育」（上）

—鈴木秀勇教授の

教育研究方法意識に触れつつ—

われわれとは何か

—現象学における「共同人間存在」の問題—

○第九十三集 前川清太郎教授退職記念号

（一九八五年十二月発行）

明治末年の鷗外

抒情詩の表現様式

—「四季」派における主体と時間の展開—

『西遊記』と神話・祭祀

—「人參果物語」の読み方—

内村鰭香伝記考証序説《中》

読書の現象学への序説

エズメの苦界

鈴木修一

伊藤克敏

橋本侃

湯田豊

黒沢惟昭

鈴木修一

鈴木修一

前川清太郎

高野繁男

鈴木陽一

佐野正巳

鈴木修一

江頭輝雄

藤田一成

伊坂青司

—Salinger, "For Esme with Love and

Squalor"に関する一考察—

リグ・ヴェーダの哲学詩

青春の模索—ポール・モレルの場合—

馮夢龍と「開説の変」

—馮夢龍事跡考—

Glosas Silenses 研究 II

向井俊二
湯田豊
江頭輝雄
山口建治
太田強正

○第九十四集（一九八六年三月発行）

「歌行燈」考

—文学伝統と翻訳の問題をめぐって—

カルデロン劇の人物

「ドニャ・メンシアについて」

人文研究とわたくし

エピクロスが愛し求めた知

—キケロの批判を介しての考察—

「幼児音と方言音との

相关性に関する一考察」

PERSONA HUMANA Y SOCIEDAD

en la filosofía de J. Maritain

ジョン・ボチャリ
岩根 圀 和
湯田 豊
岡野 哲 士
伊藤 克 敏
Amadeo Iltara B.

○第九十五集（一九八六年九月発行）

『恋する女たち』にみられる否定的要素

—ジェラルド・クリッチの場合—
エピクロス思想の成立を探ねて
—その生き方と人間観とを中心に—

旧約聖書

文学作品についての言語学的

文体論の一考察

ENCOUNTER

WITH COLIN PEACOCK

a psycholinguistic approach to

teaching writing Hanumi Kurotani

○第九十六集（一九八六年十二月発行）

A・グラムシの市民社会論についての一考察

「人生は夢」…セヒスミンドの再生

—胎のイメージをめぐって—

《小林多喜二・一九二八》への視角

—活動写真と弁証法のこと—

『翼ある蛇』試論 —再生を求めて—

〈翻 訳〉チェスター・サイクル劇（I）

Children and the Metaphorical Expressions

Glosas Silenses 研究 III

江頭輝雄
岡野哲士
湯田 豊
古岩井嘉蓉子
黒沢惟昭
岩根 圀 和
日高昭二
江頭輝雄
橋本 侃
古岩井嘉蓉子
太田 強 正

○第九十七集（一九八七年三月発行）

荒井義明教授略歴・追悼文
カルデロン作

「密かな屈辱に密かな復讐」ならびに

「不名誉の絵師」の人物
—レオノールとセラフィーナの—

罪をめぐって—

ブリハッド・アアラニヤカ・

ウパニシャッド、V

〈翻 訳〉チエスター・サイクル劇(II)

オルダス・ハックスリーと短編小説(上)

—「サー・ハーキュリーズ」を中心として—

『会話能力の発達過程に関する一考察』

フル退場—問題劇の視点—

村田泰彦・伊藤克敏

岩根 紈 和

湯 田 豊

橋 本 侃

須 藤 明

伊 藤 克 敏

佐久間直子

○第九十八集(一九八七年十月発行)
日本赤十字奉仕団成立史稿(二・完)
—大阪を中心として—

安部公房の文体

—『棒』『砂の女』の表現様式—

アントニオ・グラムシの教育論への序章

ヴェーダーンタの精髓(一)

〈翻 訳〉チエスター・サイクル劇(III)

CHARLES PEGUY et MAXIME

吉 原 直 樹

高 野 繁 男

黒 沢 惟 昭

湯 田 豊

橋 本 侃

VUILLAUME autour de la publication

de 《MES CAHIERS ROUGES》(1)

言語学と民話の構造

〈書 評〉小林一美著『義和団戦争と明治国家』

○第九十九集 小沢勇教授退職記念号

(一九八七年十二月発行)

小沢勇教授略歴・送る言葉

地理学の総合的立場と国家社会の理念型

脱近代化の目ざす課題

『チャタレイ夫人の恋人』について

—生命の優しき—

ヴェーダーンタの精髓(II・完)

〈翻 訳〉チエスター・サイクル劇(IV)

欧米における幼児言語習得研究の沿革(上)

日本語教育に関する比較考察

—イギリス、スイス、並びに日本の—

大学のケースについて—

CHARLES PEGUY et MAXIME

VUILLAUME autour de la publication

de 《MES CAHIERS ROUGES》(2) Kyoshi KURATA

〈資料ノート〉占領期大阪における日本

赤十字奉仕団の活動(二断面)

Kyoshi KURATA

古岩井嘉蓉子

山 口 建 治

東保憲・橋本 侃

宮 井 隆

近 藤 正 栄

江 頭 輝 雄

湯 田 豊

橋 本 侃

伊 藤 克 敏

上 條 雅 子

―日赤大阪府支部奉仕課『農繁保育
所関係書類』(昭和二十六年度)―

吉原直樹

○第百集 人文学会三十五周年

『人文研究』第百集記念号

(一九八八年三月発行)

人文学会三十五周年・『人文研究』

第百集を祝って

山田 操・向井俊二

大林彦・神川正彦

中西 治・工藤喜作

前川清太郎

近藤 正栄

大衆化時代の宗教―解放神学研究(二)―
現代DDR文学をめぐる

二、三の問題について

―ピーアマン事件以後(下)―

塚田 眞幸

伊藤 克敏

欧米における幼児言語習得研究の沿革
ブリハッド・アーラニヤカ・

ウパニシャッド、VI・1―3

―原典および解説―

湯田 豊

橋本 侃

宮井 隆

〈翻 訳〉チェスター・サイクル劇(V)
〈研究ノート〉土地と人のパンセ
〈資料紹介〉明治前期に於ける一真言

宋寺院の研究(その二)

―『観音寺日譜』を素材にして―

中島三千男

〈資料〉『人文研究』総目録・執筆者目録 他

○第百一集(一九八八年十月発行)

農地改革と農業雑誌

グラムシにおける「存在」^{「ユージェン」}と「当為」^{「ドゥヴァレ」}

―「実践の哲学」研究・序論―

神学の解放・解体

―解放神学研究(2)―

〈翻 訳〉チェスター・サイクル劇(VI)

〈研究ノート〉近代における社家身分の再編過程

―大山崎離宮八幡宮を素材として―

〈書 評〉上條雅子・黒沢惟昭・鈴木陽一 共著

『近代の再検討―ポスト・モダンの視点から』

久田 弗明

○第百二集(一九八八年十二月発行)

マイ・シカゴ・ストーリー

―1920年代都市的世界―

エピクロス思想における「思慮」^{「プロクシス」}

―「哲学する」ことを再検討する試み―

反キリスト(1)

第三革命の神話

―解放神学研究(3)―

〈翻 訳〉チェスター・サイクル劇(VII)

近藤 正栄

橋本 侃

湯田 豊

岡野 哲士

宮井 隆

Thomas Middleton's Comedies and

the Morality Convention Hiroko Okuda

王権と女性排除

—Macbethをテキストとして— 佐久間 直子

○第百二集（一九八九年三月発行）

「思想戦」の論理と操作性

占領期横浜における町内会の一動向

—弘報委員会の創設過程を中心として—

〈翻〉 訳 チェスター・サイクル劇 (VIII・IX)

歴史と救済史 —解放神学研究(4)

Robert ArminのHamletを何演じたか

—Shakespeareの1600年頃の

ロンドン演劇界—

〈書〉 評 グラムシのヘゲモニー概念に

関する若干の問題点

—松田博編『グラムシを読む』を読んで—

ロンドン演劇界—

○第百四集 宮井隆教授追悼号

(一九八九年十月発行)

官井隆教授略歴・業績一覽

追悼文

近代スペインの一局面

—マドリッドへの遷都をめぐる—

反キリスト(2)

大衆宗教の無脊椎化

—解放神学研究(5)—

〈翻〉 訳 チェスター・サイクル劇 (X)

反キリスト(3)

○第百五集（一九八九年十二月発行）

擬装されたヒューマニズム

—解放神学研究(6)—

『ロンブス研究』(その六)

—「トスカネリの書簡」(下)—

ヴェネツィアと文人たち(二)

—バイロンとヴェネツィアの

〈自由〉あるいは〈圧制〉

〈翻〉 訳 チェスター・サイクル劇 (XI)

Glosses Silences 研究IV

〈学会報告〉第36回日本社会教育学会

開催状況

〈書〉 評 黒沢惟昭著『国家と道徳・教育

—物象化事象を読む—

山田 操・和崎春日

黒沢惟昭

藤田 一成

湯田 豊

近藤 正栄

橋本 侃

湯田 豊

近藤 正栄

橋本 侃

湯田 豊

近藤 正栄

青木 康征

鳥越 輝昭

橋本 侃

太田 強正

黒沢 惟昭

井上 正

井上 正

井上 正

井上 正

井上 正

井上 正

井上 正

井上 正

吉原直樹著『戦後改革と地域住

民組織——占領下の都市町内会』

藤田弘夫

〈学会報告〉第2回社会主義理論学大会

○第百六集（一九九〇年三月発行）

オルダス・ハックスリーと短編小説

（中の一）——揶揄と風刺の諸相（前期）——

ヴェネツィアと文人たち（二）

——バイロンと先行の四人の文学者

ブリハドアーラニヤカ・

ウパニシャッド、VI・4—5

——原典および解説

〈翻 訳〉チエスター・サイクル劇（XII）

弾詞『義妖伝』校注試稿（二）

須藤明

鳥越輝昭

湯田豊

橋本侃

山口建治・氷上正

○第百七集（一九九〇年十月発行）

旧外地における中国語教育

——東北地区を除く中国における状況——

ヴェネツィアと文化人たち（三）

——スタンダール、バイロン、そして

ヴェネツィアの〈陽気さ〉と〈圧政〉

チャーンンドギヤ・ウパニシャッド、

第一章および第二章——翻訳および解説——

〈翻 訳〉チエスター・サイクル劇（XIII）

那須清

鳥越輝昭

湯田豊

橋本侃

○第百八集（一九九〇年十二月発行）

シャルル・ペギーの宗教思想（一）

——霊の夜の賛歌——

ヴェネツィアと文人たち（四）

——プロテスタントの「古典学者」

トマス・コリヤットの見た

1608年のヴェネツィア

チャーンンドギヤ・ウパニシャッド

第3章および第4章——翻訳および解説——

〈翻 訳〉チエスター・サイクル劇（XIV）

〈講演記録〉石井部隊と白木医学アカデミズム

〈講演記録〉旧日本軍の毒ガス戦

〈特別寄稿〉東欧革命から

〈英 訳〉「源氏物語」について 世界の民衆は何を学ぶか

（英 訳）「源氏物語」について

○第百九集（一九九一年三月発行）

日本の宗教——その本質および発展——

シャルル・ペギーの宗教思想（二）

——托身（受肉）論——

ヴェネツィアと文化人たち（五）

倉田清

鳥越輝昭

湯田豊

橋本侃

常石敬一

栗屋憲太郎

加藤哲朗

秋山勇造

湯田豊

倉田清

○第百十集（一九九一年十月発行）

一 シェイクスピア、ジョンソン、コリヤット、モリソンとウェネツィアの《墮落》
 訳 チェスター・サイクル 劇 (XV)
 (翻 評 日本社会教育学会編
 書)

『現代的人權と社会教育』 嶺井正也

○第百十一集（一九九一年十二月發行）

恋物語における超自然的イメージの意味

—人間と神の恋と

人間と妖怪の恋をめぐつて――張

シャルル・ペギーの宗教思想 (四)

— 叙事詩『エヴァ』の構想とその神学 —

〔翻〕チエスター・II サイクル劇 (XVI A)

チェーンソーギヤ・

ウパニシャッド第5章

明治期におけるポウの翻訳

大学制度とドイツ・ロマン派

| | | |
|---|---|---|
| 湯 | 秋 | 佐 |
| 田 | 山 | 藤 |
| | 勇 | 朋 |
| 豊 | 造 | 之 |

自由と恩寵
オルダス・ハックスリーと短編小説
（中の二）——擲揄を免れた主人公——
ヴェネツィアと文人たち（六）

| | |
|---|---|
| 須 | 倉 |
| 藤 | 田 |
| 明 | 清 |

○第百十二集 那須清教授退職記念号

(一九九二年三月發行)

私と中国語

鬼来迎^二考^一—日本における仏教芸能の^二表現^一—

語りもの『白蛇伝』の民俗

〔翻 訳〕チエスター・サイクル劇（XVI）
弾詞『義妖伝』校注試稿（二）

橋本 侃
山口建治・氷上 正

現象学と世界体験

ローペ・デ・ベガ作『処罰にして復讐にあらず』

魯迅「阿長と『山海經』」をめぐって

尾山
上 口
兼 建
英 治

——密告者を巡って——

吉川良和 岩根 圀和

—保母から聞いた「長毛」(太平天国)の話—
『横浜貿易新報』を通して見る

小島 晋治

在留中国人のありよう

大里 浩秋

出土文献から見た秦漢以前の

「若」と「如」について

大西 菟也

試談対外漢語的教學方法

王 迺珍

七夕の伝説と祭祀習俗

鈴木 陽一

○第百十三集 故・鈴木英允教授追悼号

(一九九二年五月発行)

故・鈴木英允教授略歴

追悼文

岡野哲士・荻原怜二

橋本 侃

ニーチェ哲学入門

湯田 豊

シャルル・ペギーの宗教思想(五)

—「罪と恩寵」についてのペギー的

逆説と現代文学におけるその展開—

倉田 清

ヴェネツィアと文人たち(七)

—アデイソンと「権略」の都ヴェネツィ

アにおける〈美〉の不在、ギボンと

鳥越 輝昭

感動詞の呼びかけ語の変遷(一)

秋元 美晴

—明治時代から昭和時代にかけて—

東西文化衝突の中の『椿姫』

—最初に西洋の恋愛を伝えた作品として—

張 競

〈翻 訳〉チェスター・サイクル劇(XVII)

—キリストの黄泉降下—

橋本 侃

〈講演記録〉イギリス・ロマン主義の

特徴について

岡地 嶺

ワーズワスの詩の世界 —心の絵画—

岩崎 豊太郎

再びセルバンテス、

『アルジェの物語』の韻律について

岩根 紈和

教育音声学 —テキストの編纂—

深澤 俊昭

ウィリアム・カール・ウィリアムズ

ケネス・オキモト

〈翻 訳〉中国古代音楽史稿(2)

吉川 良和

○第百十四集(一九九二年十月発行)

ヴェネツィアと文人たち(八)

—ド・ブロス議長と美醜の混在する

快楽の都ヴェネツィア—

鳥越 輝昭

芥川龍之介とドイツ文学

高橋 喜郎

感動詞の呼びかけ語の変遷(II)

—明治時代から昭和時代にかけて—

秋元 美晴

文献に見出せる冥婚習俗とその意味

廣田 律子

〈翻 訳〉チェスター・サイクル劇(XVIII)

橋本 侃

日本語文韻律素論(一)

深澤 俊昭

〔翻〕 訳 中国古代音楽史稿(3)

吉川 良和

○第百十五集(一九九三年三月発行)

シヨールペンハウアー哲学における争点
道徳と道具

湯田 豊

―道具との類推においてみられた道徳と

道徳の哲学の可能性

大西 正人

エンサイクロペディアとノヴァーリス

―一八世紀末エンサイクロペディア理

念における『一般的草稿』の位置―

シャルル・ペギーの霊性(一六)

佐藤 朋之

―内的現実の探究(一)―

倉田 清

ヴェネツィアと文人たち(九)

―モンテスキューとヴェネツィアの

劣等な政体ならびに倫理的墮落

そしてゴシック様式への評価

鳥越 輝昭

〔翻〕 訳 チェスター・サイクル劇

(XIX & XX)

橋本 侃

「心」の英訳について

発話末における日本語接続詞「けど」

文武両道―流鏑馬

秋山 勇造

日本語文韻律素論(2)

井谷 玲子

〔研究ノート〕テオドル・フオンターネの

テュー・ワー・シャウシ

深澤 俊昭

「エフライム・ブリースト」についての一考察
〔翻〕 訳 中国古代音楽史稿(4)

田中 百子
吉川 良和

○第百十六集 故・渋谷重光教授追悼号
(一九九三年四月発行)

渋谷重光教授略歴・業績

追悼文

現代日本における社会変動

―技術革新、労働力の質の変化

ヘーゲルの行為論

その地域的展開―

虚偽の問題

―相互承認としての行為

―『ソフィステス』

263b4・13の一解釈―

横倉 節夫
大西 正人

〔翻〕 訳 チェスター・サイクル劇(XVI)

〔翻〕 訳 チャーンドーギヤ・

ウパニシャッド、第7章および第8章

―翻訳および解説―

田坂 さつき
橋本 侃

座田司氏の八幡神の本質に関する梗概の

注釈付き翻訳(一)序文付き

湯田 豊

日本語文韻律素論(3)

〔翻〕 訳 中国古代音楽史稿(5)

テュー・ワー・シャウシ

深澤 俊昭

吉川 良和

横倉 節夫
岡野哲士・三星宗雄

○第百十七集（一九九三年六月発行）

ニーチェ、フロイト、およびブーバー
 ヴェネツィアと文人たち（十）
 —ヴェネツィアに関するゲーテの古典
 主義性とベックフォードのロマン主義性

湯田 豊

（翻） 訳 チェスター＝サイクル劇（XXII）
 （書） 評 黒沢惟昭編『生涯学習時代の社会教育』
 （明石書店・1992年10月）を読む

鳥越 輝 昭
 橋本 侃

日本語文韻律素論（4）

三輪 建 二

（翻） 訳 中国古代音楽史稿（6）

深澤 俊 昭
 吉川 良 和

（翻） 訳 座田司氏の八幡神の本質に
 関する梗概の注釈付き翻訳（2）

テリ・ウィ・シャウイン

○第百十八集（一九九三年十月発行）

ヴェネツィアと文人たち（十一）
 —バイロン、シェリー、ラスキン、

光、色、教訓 鳥越 輝 昭

タイツテリヤー・ウパニシャッド
 —翻訳および解説—

湯田 豊

（翻） 訳 チェスター＝サイクル劇（XXIII）
 （講） 演 日中復交20年と戦後補償問題
 動詞〈持つ〉は所有の意味だけか？

橋本 侃
 田中 宏
 古岩井嘉蓉子

文体の移植 —永井荷風の場合—

Clothes Shares 研究A

シモーヌ・ヴェーユにおける
 自由意志と神の臨在

秋山 勇 造
 太田 強 正
 井上 正

（翻） 訳 座田司氏の八幡神の本質に
 関する梗概の注釈付き翻訳（3）

テリ・ウィ・シャウイン

（翻） 訳 中国古代音楽史稿（7）

吉川 良 和

○第百十九集（一九九四年二月発行）

インド哲学における死生観

湯田 豊

（翻） 訳 チェスター＝サイクル劇（XXIV）
 FLTTの統語的特徴

橋本 侃
 石黒 敏 明

迂回表現とは何か…言語的、語用論的
 或いは社会現象の如何か？

井谷 玲 子

（研究ノート）アマゾン・メモ

—色彩・環境・熱帯密林—

三星 宗 雄

（翻） 訳 座田司氏の八幡神の本質に
 関する梗概の注釈付き翻訳（4）

テリ・ウィ・シャウイン

（翻） 訳 中国古代音楽史稿（8）

吉川 良 和

○第百二十集（一九九四年六月発行）

旅順口区九三小学の日本語教育参観
 衣服産業の再編過程と移民女性の参入…

那須 清

西ヨーロッパの事例から

論現代中国人的心理更新

アイタレーヤ・ウパニシャッド

―翻訳と解説―

明治期におけるキーツの翻訳

―花袋・有明・酔夢・無弦―

ヘンリー・ジェイムズとヨーロッパの

アメリカ人芸術家像(一)

接続詞「but」の語用論・意味論

〈翻 訳〉座田司氏の八幡神の本質に

関する梗概の注釈付き翻訳(5)

―結論と参考文献―覧付

〈翻 訳〉中国古代音楽史稿(9)

テイー・ロー・シャウイン
吉川 良和

○第百二十一集(一九九四年六月発行)

明治期の翻訳者(一) 尾崎紅葉

ヴェネツィアと文人たち(十二)

―ダリユー伯爵の貴族政批判―

中国芸能生成原因的探討

論現代中国倫理観の更新

「知識の定義」の破綻について

―プラトン『テアイテトス』

208c6-210b3の一解釈―

田坂 やつき

〈書 評〉市民社会の制御下に企業社会を置くことの

必要性について―現代市民社会と企業国家

L1、L2喪失過程の

二重スレッショールド仮説

〈翻 訳〉中国古代音楽史稿(10)

○第百二十二集(一九九四年十二月発行)

人間形成論考―意味と関わり―

明治期の翻訳者(2) 山田美妙

シャルル・ペギーの霊性(七)

―社会主義とカトリシズム―「誠実」か

「変節」かの問題をめぐって―

ヴェネツィアと文人たち(十三)

―W・D・ハウエルズの見た

―喪中の―ヴェネツィア―

〈翻 訳〉カウシータキ・

ウパニシャッドの翻訳

晴雨の混乱と現代日本文学の詩的想像力

―狐の嫁入りから日照り雨へ―

日本語版LASの開発

文法化現象

―「ふり」から「ぶり」へ、及び

「なま」から「なま」への接辞化―

笠 間 千 浪
于 欽 徳
湯 田 豊
秋 山 勇 造
山 口 ヨシ子
井 谷 玲 子
テイー・ロー・シャウイン
吉川 良和
秋 山 勇 造
大 西 勝 也
秋 山 勇 造
倉 田 清
鳥 越 輝 昭
湯 田 豊
小 馬 徹
石 黒 敏 明
赤 尾 勝 己
石 黒 敏 明
吉 川 良 和
秋 元 美 晴

〔翻 訳〕中国古代音楽史稿（11）

吉川 良和

シャルル・ペギーの霊性（八）

——「対神徳」の優位と、『希望』の秘義——

倉田 清

○第百二十三集（一九九五年三月発行）

比較思想の未来

明治期の翻訳者（3）若松賤子

湯田 豊
秋山 勇造

ヴェネツィアと文人たち（十四）

——W・C・ハズリット、ブルクハルト、

民主政、貴族政 鳥越 輝昭

〔講演記録〕戦後生活のなかで戦争を考える

——「学徒出陣」五十年によせて——

ジオルジュ・サンド・晩年の小説

田中正俊
佐藤 夏生

『とん限り樅の木』試論・

植物、比喩、時代の「病い」

〔翻 訳〕中国古代音楽史稿（12）

武田 宜久
吉川 良和

誤訳の解剖（2）

中国古代音楽史稿（13）

吉川 良和

レイコフの挙げた迂回表現の再分析・

——関連性理論からの説明——

色名による分析 三星 宗雄

〔研究ノート〕ニーチエ―再検討―

——自然の色彩の測色データおよび

閉じ込められた色…緑 湯田 豊

——「ゴッティエ、テレーヌとヴェネツィアの

宗教ならびにバロック建築—— 鳥越 輝昭

○第百二十四集（一九九五年九月）

初期ヘーゲルにおける〈愛〉の変容

——ロマンティズムからリアリズムへ——

王士禎と袁枚

——晴代康・乾期の詩風の変化——

シェイクスピア劇の宗教性

——宗教抗争の狭間で創作活動——

明治期の翻訳者（4）内田魯庵

橋本 侃
秋山 勇造

○第百二十五集（一九九五年十二月発行）

明代通俗小説繁栄の原因探討

——論下層文人的女性崇拝——

カルロス五世の引退

——ブルゴーニュ公爵からの退位（一）——

シャルル・ペギーの霊性（九）

——『苦しみのパラード』『心のバラード』——

『人生は夢』のバロック性

藤田 一成
倉田 清

——セヒスムンドとロサウラの

怪物性を巡って―

中国古代音楽史稿(14)

〔書〕西澤晃彦著『隠蔽された外部―

都市のエスノグラフィー』

岩根 圀和
吉川 良和

小馬 徹

伝達意図と日本語終動詞

―関連性理論の立場から―

日本語多義動詞の意味と文型記述

〔研究ノート〕ラークル《Verfall》の周辺

井谷 玲子

国 広 哲 弥

―《Verfall》の成立―

ボードレルとヘルダーリン 高橋 喜郎

○第百二十六集 向井俊二教授退職記念号

(一九九六年三月発行)

向井俊二さんのこと

疋 田 三 良

『開拓者の後裔』を読んで

―向井俊二氏の市民的倫理―

熊 野 騏一郎

日本漢詩的特徴散論

―伊藤仁斎的学者詩風―

巖 明

ポスト近代化社会における

エスニシティ研究の視座

笠 間 千 浪

カータカ・ウパニシャッド

―翻訳および解説―

湯 田 豊

定型表現をめぐる

カルロス五世の引退

―ブルゴーニュ公爵からの退位(二)―

藤 田 一 成

ヴェネツィアと文人たち(十六)

―ヘンリー・ジェイムズ・ブラスキンの影響、

ヴェネツィア人の素朴性、固定願望―

ボーの19世紀アメリカ機械文明批判

鳥 越 輝 昭
山 口 ヨシ子

○第百二十七集(一九九六年九月発行)

明治文学界とモーパッサン

『伝説』と『歴史』の断層を越えて

―『夜明け前』はいかに読まれて来たか

カータカ・ウパニシャッドを読む

カルロス五世の晩年

―ユステ修道院への道(二)―

藤 田 一 成

シャルル・ペギーの霊性(十)

―シャルトルへの道行き―

アンリ・ド・レニエの楽園ヴェネツィアへの愛

―ヴェネツィアと文人たち(十七)―

『人生は夢』…名譽劇の視点から

―クロタルドの行動を巡って―

『息子と恋人』に見る女性の生き方

国語辞典と類義語

岩 根 圀 和
小 野 ゆき子
国 広 哲 弥

○第百二十八集（一九九六年十二月発行）

明治文学界とツルゲーネフ

F・Wフェルスターの公民教育論

ブラシュナ・ウパニシャッド

—翻訳と解説—

フランス語の拡張と少数言語の抑圧

—抑圧される側からみた

言語政策史的展望—

シャルル・ベギーの霊性（十二）

—思想の源泉（二）

モーリス・バレスと死の町ヴェネツィア

—ヴェネツィアと文人たち（十八）—

○第百二十九集（一九九七年三月発行）

原抱一庵 —生涯と業績—

ダーム（意中の女性）からノートル・

ダーム（聖母マリア）へ

カルロス五世の晩年

—ユステ修道院への道（二）

ヘッセと生ける町ヴェネツィア

—ヴェネツィアと文人たち（十九）—

ピクチャレスクとワーズワスの想像力

『ブライズデイル・ロマンズ』

—詐欺師としてのウエスタヴェルト像—

公平の原理と道徳

○第百三十集（一九九七年九月発行）

シャルル・ベギー

—実証主義の博士たちに抗して

—現代世界への近代世界の超克—

マリア信仰の原型

カルロス五世の仮寓生活

—ハランデイーリヤにおける12週間—

末松謙澄 —生涯と業績—

プロフェッサーとドクター

—ヘンリー・ジェイムズの

アメリカ人詐欺師—

Gloss Shores 研究VI

○第百三十一集 猿田勝美教授退職記念号

（一九九七年十二月発行）

猿田先生のこと

ユステ修道院におけるカルロス五世（一）

—その隠遁生活と死—

瀬沼夏葉 —生涯と業績—

歴史学者ホレイシオ・ブラウン

秋山勇造

大西勝也

湯田豊

臼井盛利

倉田清

鳥越輝昭

秋山勇造

石井美樹子

藤田一成

鳥越輝昭

岩崎豊太郎

山口ヨシ子
田坂さつき倉田清
石井美樹子藤田一成
秋山勇造山口ヨシ子
太田強正

横倉節夫

藤田一成
秋山勇造

とヴェネツィア

―ヴェネツィアと文人たち(二〇)―

〔翻 訳〕コヴェントリー＝サイクル劇(Ⅰ)

―「聖体」と呼ばれる劇―

「西部の蜂起」について(Ⅰ)

カルデロン…『サラメアの村長』

―ドン・メンドとラサリーリョ―

鳥越輝昭

橋本侃

岡島千幸

岩根圀和

○第百三十三集 橘川慶二先生追悼号

(一九九八年九月発行)

橘川慶二先生の御逝去を悼む

橘川慶二先生を悼む

16世紀インディアス社会経済史序説(Ⅰ)

1990年代のキューバにおける

「経済改革」の理念

ユステ修道院におけるカルロス五世(2)

―その隠遁生活と死―

馬場孤蝶 ―西欧文学の開拓―

マイトラヤーニーヤ・ウパニシャッド(Ⅰ)

―翻訳と解説―

未来派、過去主義者そしてヴェネツィア

―ヴェネツィアと文人たち(21)―

〔翻 訳〕コヴェントリー＝サイクル劇(Ⅲ)

〔書 評〕都市と思想

―『ヨーロッパの都市と思想』を読む―

『名譽の医師』…ローペからカルデロンへ

―発想の相違―

日本語終助詞「ネ」についての考察

海老塚 レイ子
郭 紅 毅

中島 三千男

岩根圀和

青木 康 征

後藤 政 子

藤田 一 成

秋山 勇 造

湯田 豊

鳥越 輝 昭

橋本 侃

水田 洋

岩根 圀 和

井谷 玲 子

○第百三十二集 テリー・リー・シャーウィン先生追悼号

(一九九八年三月発行)

テリー・リー・シャーウィン先生の死を悼む

テリー・リー・シャーウィン先生のこと

サブカルチャー研究の今日的意義について

シュヴェーター・シュヴァタラ

・ウパニシャッド

―インドの一神教のルーツ―

長田秋濤 ―生涯と業績―

〔翻 訳〕コヴェントリー＝サイクル劇(Ⅱ)

アメノウズメ考

日本語動詞パラダイムについて

ターナーとコンスタブルの都市幻想

明清時代の詩風の変化と日本漢詩の

特色の形成

湯田 豊

秋山 勇 造

橋本 侃

テリー・リー・シャーウィン

橘川 慶 二

岩崎 豊太郎

巖明・浅山佳郎

英語母語話者による

ピッチアクセントの習得 前田マーガレット

『オセロウ』から『ドン・カズムーロ』へ

—主人公の「嫉妬」を中心に見た

ブラジル版オセロウの翻案— 武田 千香

○第百二十四集 倉田清教授退職記念号

(一九九八年十二月発行)

「意志的直観」のひと

—ムッシュ・クラタ賛—

マイトラヤーニヤ・ウパニシャッド(2)

—翻訳および解説—

ユステ修道院におけるカルロス五世(3)

—その隠遁生活と死—

〔翻 訳〕コヴェントリーⅡサイクル劇(Ⅳ)

香港の大学の現状と展望

—返還の前と後—

日米関係の起源について

説 九

○第百二十五集 尾上兼英・小島晋治・

松本昭教授退職記念号

(一九九九年二月発行)

〈座談会〉わが戦後中国学事始め

—中国語学科退休教授三人談—

尾上兼英・小島晋治
松本 昭

1930年代初期、

中国共産党の内部粛清の実態

石川伍一のこと

香港における産業構造の変動と

小説における引用 (intertextuality)

—『西湖二集』に引用された

小説と戯曲について—

ツエは中国語にあらざるや

「胡」のつくことは「胡説」「胡乱」

—『うそ』の語源は中国語の

名詞中心の統語論(2)

『胡説』か? 補説—

中国的民間反語—

秘蜜語研究—

那須先生の死を悼む

中国語学科10年略史

○第百三十六集 (一九九九年三月)

ヘーゲル最初の哲学体系構想

—イエーナ大学「哲学序論」講義草稿の考察—

マイトラヤーニヤ・ウパニシャッド(3)

小林 一美
大里 浩秋

沢田 ゆかり

鈴木 陽一
望月 眞澄

山口 建治
松村 文芳
石 林
鈴木 陽一

伊坂 青司

——翻訳および解説——
ユステ修道院におけるカルロス五世(4) 湯田 豊

——死にいたる三週間——
藤田 一成
〈翻 訳〉コヴェントリーIIサイクル劇(V) 橋本 侃

『ヨーロッパの都市と思想』
——水田洋氏における書評の政治学——
湯田 豊

〈史料紹介〉「観音寺日譜」(1)
(京都府乙訓郡大山崎町観音寺所蔵)

——延享元年日譜①——
石井 日出男
イギリス・ロマン派の詩と絵画における自然
——ブレイク、ワーズワス、

ターナーとコンスタブル——
岩崎 豊太郎

○第百三十七集(一九九九年九月発行)

ブロッキーとレニエ

——ヴェネツィアと文人たち(22)——
鳥越 輝昭

〈研究ノート〉『明六雑誌』の中の英国詩人
秋山 勇造

〈翻 訳〉コヴェントリーIIサイクル劇(VI) 橋本 侃

〈史料紹介〉「観音寺日譜」(1)

(京都府乙訓郡大山崎町観音寺所蔵)

——延享元年日譜②——
石井 日出男
文革中における中国語絶対敬語の復活と

その社会的背景 彭 国 躍

Glosses Sienas 研究 VII
寛容と共生へ向かつて
太田 強 正

——デリーベスの捉らえた内戦——
中村 美子
中国民間数字隠語——秘密語研究(二)——
石 林

○第百三十八集 小泉公史教授退職記念号

(一九九九年十二月発行)

小泉先生のこと——思い出すままに——
橋本 侃
「実証性のうちに」とどまる見せかけだけの
普遍的な存在論」と「本当に普遍的な存在論」
——『ブリタニカ百科事典』項目論文

「現象学」執筆をめぐるつての

フッサールとハイデガー——
鈴木 修 一

F・V・ディキンズ・南方熊楠共訳の日本文学
日本におけるトルストイの原像
秋山 勇造

他宗教理解と三位一体論
八島 雅彦

〈翻 訳〉コヴェントリーIIサイクル劇(VII) 橋本 侃

ワーズワスの崇高について
岩崎 豊太郎

日本語動詞の多義体系(2)

中国的娼妓隠語——秘密語研究(三)——
国 広 哲 弥

〈学会報告〉21世紀の英文法の未来は?
古岩井嘉蓉子

○第百三十九集(二〇〇〇年三月発行)

文化／社会的境界線をめぐる言説の模索

―二項対立の袋小路を超えて―

〈研究ノート〉『西国立志編』の中の西欧作家
ウパニシャッドについて

〈翻 訳〉コヴェントリー・サイクル劇(VII)

〈史料紹介〉『観音寺日譜』(2)

(京都府乙訓郡大山崎町観音寺所蔵)

―延享三年日譜①

イーデイス・ウオートンの男性像

―『歓楽の家』ネガティブ・ヒーロー

としてのセルデン像―

シャーロット・ブロンテの成功と

弟ブランウエルの挫折

○第百四十集 犬飼政一教授退職記念号

(二〇〇〇年九月発行)

犬飼先生を送る

―etwas glücklich etwas traurig―

覚醒する意識

―ヘーゲル「一般哲学概説」(一八〇三年)

講義草稿(二)の考察―

〈研究ノート〉未来における新しい人間像

―ツァラトゥストラのメッセージ―

〈翻 訳〉旅立ち

〈史料紹介〉『観音寺日譜』(2)

(京都府乙訓郡大山崎町観音寺所蔵)

―延享三年日譜②

ヒトラー・ファシズムと闘った人びと(1)

二人のマリア

―反ファシズム抵抗運動に捧げた生涯―

英語録音教材の韻律的特徴

○第百四十一集 (二〇〇〇年十二月発行)

中村元の『インド思想史』

―一つの読み方―

〈翻 訳〉コヴェントリー・サイクル劇(IX)

中国稲作文化东传日本探源

『十二夜』における音楽と水のイメージ

―変容の象徴として―

○第百四十二集 (二〇〇一年三月発行)

わたくしの唯識

―ヴァスバンドウの世界―

〈翻 訳〉コヴェントリー・サイクル劇(X)

〈史料紹介〉『観音寺日譜』(3)

(京都府乙訓郡大山崎町観音寺所蔵)

佐藤 健治

石井 日出男

中村 浩平

前田 マーガレット

湯田 豊

橋本 侃

金 健人

濱田 あやの

中村 浩平

伊坂 青司

湯田 豊

橋本 侃

湯田 豊

湯田 豊

—寛延二年日譜①

ワーズワスの想像力と湖

石井 日出男
岩崎 豊太郎

スピーチ・アクト理論と

応用言語学におけるその有用性

〈研究ノート〉多言語多文化社会スイスの実状

チヨースー没後600年

—中世詩研究の今—

奥田 宏子

○第百四十三集 古川知生教授退職記念号

(二〇〇一年九月発行)

古川先生の人間学

—長い間ありがとうございました—

フィリピン国立銀行と通貨制度の再建

—1921〜27年—

S・ハイム対第11回中央委員会総会

自然から生成する精神

—ヘーゲル「一般哲学概説」

講義草稿(二)の考察—

〈研究ノート〉唯識の体系

—研究のための一つの戦略—

〈翻訳〉コヴェントリー・サイクル劇(XI)

〈史料紹介〉「観音寺日譜」(3)

(京都府乙訓郡大山崎町観音寺所蔵)

—寛延二年日譜②

太田南畝の狂詩の文法

マシヤード・デ・アシスの生との和解

—『プラス・クーバスの死後の回想』と

『アイレスの覚書』から見えてくるもの—

武田 千香

○第百四十四集 石井陽一教授退職記念号

(二〇〇一年十二月発行)

石井陽一先生へのエール

『怪文書』と『われらが不満の冬』を

めぐる諸問題

アメリカ植民地期フィリピン議会政治

の生成と展開

—1899〜1941年—

〈翻訳〉コヴェントリー・サイクル劇(XII)

〈史料紹介〉「観音寺日譜」(4)

(京都府乙訓郡大山崎町観音寺所蔵)

—宝暦二年日譜①

〈講演記録〉中国山西省における日本軍性

暴力に関する調査について

『天うつ浪』のなかのニーチェ

中国稲作文化系伝日本再探

チリ…少数独裁共和制から民衆の政治参加へ

石井 日出男
浅山佳郎・厳明

青木 康征

塚田 眞幸

永野 善子

橋本 侃

石井 日出男

石田 米子

鈴木 修一

金 健人

ズル・ズル・ズル

〈翻 訳〉エゲリア巡礼記

太田 強 正

○第百四十五集 寛敏先生追悼号

(二〇〇二年三月発行)

寛敏先生を悼む

断章

寛君どうも有難う

寛さんのこと

寛先生からの言葉

寛先生との思い出

女詐欺師の登場する風景

—サウスワース『見えざる手』

フェルスターとヴィヘルン

—フェルスターのヴィヘルン評価について—

〈翻 訳〉コヴェントリー・サイクル劇(XIII)

〈史料紹介〉「観音寺日譜」(4)

(京都府乙訓郡大山崎町観音寺所蔵)

—宝暦二年日譜②

アルプスと崇高—ワーズワースとターナー

〈研究ノート〉戸籍制度とジエンダー

石井 日出男
岩崎 豊太郎
星野 澄子

主不在の研究室

〈翻 訳〉コヴェントリー・サイクル劇(XIV)

〈史料紹介〉「観音寺日譜」(5)

(京都府乙訓郡大山崎町観音寺所蔵)

—宝暦九年日譜①

現代中国語の「時制」の意味研究

○第百四十七集 佐野正巳先生追悼号

(二〇〇二年十二月発行)

佐野正巳先生を悼む

佐野正巳さんのこと

永痛の追憶

佐野先生のこと

F・シュライエルマッハーの罰論に

ついでに批判的考察

『コリン』、ヤンカ、ミールケ

「山月記」の季節について

〈翻 訳〉コヴェントリー・サイクル劇(XV)

西周『致知啓蒙』を読む(上)

チリ、新自由主義と独裁

(1973—1989)

現代社会における都市景観と住民

—谷中・三崎坂を事例として

鳥越 輝 昭
橋本 侃
石井 日出男
加藤 宏 紀
日高 昭 二
高野 繁 男
高野 明
浅山 佳 郎
大西 勝 也
塚田 眞 幸
三浦 吉 明
橋本 侃
鈴木 修 一
竹中 宏 子

○第百四十八集 松山正男教授退職記念号

(二〇〇二年九月発行)

ダルトン・ロビンソン

○第百四十八集 湯田豊・伊藤喜栄教授退職記念号

(二〇〇三年一月発行)

ディオニュソスに憧れる

岡野哲士

アポロ俊英の徒、湯田豊さん

三星宗雄

湯田豊先生のご定年退職

小馬徹

ある時代の終わり―

八久保厚志

喜栄先生の遠近法

石井美樹子

伊藤喜栄先生と伊藤家の食卓

鈴木江津子

親の死と子どもの親権

鈴木修一

―シェイクスピアを社会の合わせ鏡にして

上條雅子

○第百四十九集 (二〇〇三年六月発行)

『離宮八幡宮の成立』 試論

鈴木江津子

西周『致知啓蒙』を読む(下)

鈴木修一

英国における現代語教育の現状

上條雅子

―歴史的背景を踏まえて―

国府方麗夏

○第百五十集 (二〇〇三年九月発行)

聞き手依存型のコミュニケーション方略―

山口建治

―二十一世紀を見据えて

孫安石

中国語学科創設十周年(一九九七年)

石井美樹子

記念シンポジウム―

石井美樹子

まえがき

基調報告:『二十世紀の日中関係』

(付:二〇〇一年に思う)

大里浩秋

『私と中国研究―中国・魯迅との出会い』

小島晋治

『日本の中国・香港認識が意味するもの』

尾上兼英

『日本近代史と台湾』

沢田ゆかり

―批判精神の欠如について―

戴国輝

『日中関係一〇〇年から何を学ぶか』

田畑光永

『二十五年の日中交流をふりかえる』

莫邦富

質疑応答

【特集二】戦前中国における日本租界の研究

―日本人社会の形成、変容、消滅にいたるプロセスの解明―

長江上流の影薄き夢の跡:重慶租界

杭州日本租界について

蘇州の日本租界と近代都市の形成

蘇州日本租界と片倉製糸

―蘇州市第一絲廠廠志抄訳―

漢口の都市発展と日本租界

白い手のハーマイオニ

『冬物語』における王妃の裁判と三つの国の文化摩擦

女の職業としての詐欺師

—オルコット「仮面の陰で」「V・V」など

『観音寺日譜』（5）

（京都府乙訓郡大山崎町観音寺所蔵）

—宝暦九年日譜②

コヴェントリー＝サイクル劇（XVI）

『明六雑誌』の発行と廃刊について

关于现代汉语动词配价研究的几点思考

中国語動詞価理論に関する一考察

山口 ヨシ子

石井 日出男

橋本 侃

秋山 勇造

徐 峰